

中央アジアとロシア:経済協力、課題、展望

ERINA主任研究員 ウラジーミル・I・イワノフ
ERINA研究助手 ドミトリー・L・セルガチョフ

まえがき

最近、カザフスタン、キルギス、タジキスタン、トルクメニスタンおよびウズベキスタンからなる中央アジア地域は国際的な注目を集めている。特に、2001年9月11日のニューヨーク同時多発テロ事件の後、これらの国々の役割や政策、問題などがそれまでと違う視点から見られるようになった。中央アジア地域はアメリカとその同盟国がアフガニスタンで行っている対テロ報復作戦に組み込まれていき、アフガニスタンの北の隣国はワシントンにいずれかの形で協力することに同意した。ウズベキスタンでは、1,000人以上の米軍兵士が滞在し、フランス軍もハナバド空軍基地を利用してアフガニスタンへ移動している。2001年12月にパウエル米国務長官が中央アジアを訪問した後、タジキスタンおよびキルギスも国際部隊に国内空軍基地を開放した。また、これらに先立ち、米国はキルギス、ウズベキスタンおよびカザフスタンとの二カ国間軍事関係を樹立し

た。フランス米中央軍司令官による中央アジア諸国歴訪もあった。

中央アジアの有利な地理的位置は、国連によるアフガニスタンへの支援物資輸送をより容易にする。2001年10月後半に大島賢三・国連人道問題担当事務次長はトルクメニスタン、ウズベキスタンおよびタジキスタンを訪問し、アフガニスタン北部は人道的環境の面で破滅的な状況に近いと指摘した。その結果、トルクメニスタンはアフガニスタン国境の近くに2箇所の支援事務所を開設することに同意し、ウズベキスタンはテルミズ川の河川港を物資の輸送に、テルミズ空港をその保管に利用することを認め、タジキスタンは支援物資の渡河および航空輸送を認めた。

しかし、中央アジア諸国はアフガニスタン危機以前も注目を集める地域となっていた。この地域の殆どの国にとって1990年代は民族的紛争、国内過激主義の脅威、武装侵入者やテロ組織との戦いなどさまざまな問題、そして困難の

10年間となってきた。独立した中央アジア諸国およびロシアの政府はこの地域を経由して運ばれる麻薬の問題に対する懸念を強めていた。

肯定的な面に注目すれば、中央アジア諸国は、ロシアおよび中国との多国間協力を目指す「上海5カ国」に参加し、その地域的な重要性が高まってきた。中央アジア、特にカスピ海周辺は石油・ガスなどの天然資源が豊富である。2001年4月、プッシュ政権はエネルギー資源が豊富である中央アジアおよび南コーカサス地域に対する政策を再確認し、年末にかけてカスピ海パイプラインコンソーシアムは、ロシア、カザフスタン、米国および欧州からの投資（26億ドル）による石油パイプラインを稼働させた。

この論文は、中央アジアの重要性が高まりつつあること、そして北東アジアとの関連性という観点から、以下のことに焦点をあてる。

変化しつつある中央アジアとロシアとの経済関係
中央アジア5カ国のマクロ経済情勢
人口動態、雇用、生活水準
エネルギー産業の現状

また、分析にあたって、可能な範囲で中央アジア諸国の経済的・社会的傾向をロシアおよびその極東地域のそれと比較してみることも意味がある¹。

中央アジア、独立国家共同体²（以下、CIS）とロシア

歴史および相互の利害関係のため、中央アジアはロシアの対外政策の優先対象となっている。ロシア帝国、そしてソ連時代にロシア人と一緒に住んでいた中央アジアの人々は、現在も文化、情報、安全保障などの面で深い関係を持っている。カザフスタンだけでもロシア人の人口は500万人に達しており、人口の30%を占めている。他の国を見ると、ロシア人の割合はキルギスで18%、トルクメニスタンで6.7%、ウズベキスタンで5.5%、タジキスタンで3.5%である。また、最近の国勢調査（1989年）によると、ロシアには63.6万人のカザフ人、12.7万人のウズベク人、4.2万人のキルギス人、4万人のトルクメン人および3.8万人のタジク人が住んでいた³。

2001年11月30日にモスクワでCISの10周年サミットが開催された際、加盟国は自由貿易協定を作成するために努力

することに同意した。1992年まで、中央アジアの5カ国はソ連の共和国であった。地政学的状況が変化しつつある中でも、ロシアにとってこれらの国々は依然として重要な存在である。1991年以降貿易・経済関係は縮小したが、1999年にロシアの輸出は17億ドル、輸入は23億ドルに達していた⁴。言い換えれば、ロシアの中央アジア全体との貿易は、対日本、ウクライナまたは米国と同じくらいのレベルである。

ソ連が崩壊してCISになった1992年より以前は、ロシアとの取引が旧ソ連共和国の「貿易」の約60%を占め、そのGDPの4分の1をカバーしていた。経済規模の大きさから、ロシアは旧ソ連共和国の「輸出」の大部分を受け入れ、ロシアの「輸入」の50%以上はこれらの国からのものだった。1980年代後半、ロシアの総「輸出」の68%は旧ソ連内向けであった⁵。

ソ連崩壊後、こういった相互依存関係の構造が根本的に変わってきた。市場経済化による改革および新しい経済関係への移行のため、こうした貿易は効率が悪くなり、その維持が困難となってきた。経済自由化開始後すぐに貿易量への影響が見られた。しかし、政府による指導および支援がなくなったロシアの民間セクターは中央アジアを含む伝統的な市場で成功するのに必要な経験も能力も不十分であった。その結果、ロシアの経済的利益は大きく損なわれ、ユーラシアでは地政学的な均衡が失われた。エネルギー資源を含むロシアの輸出はより価格の高い、支払が保障されている市場向けに転換された。西欧諸国はすぐにロシアからのエネルギー資源、金属、木材などの未加工品・半製品を受け入れ始めた。品質が決め手となる形で食料品や消費財などの新しい輸入先が現れた。また、ロシア国内通貨ルーブルの過大評価ことも国内生産者の競争力を低下させた。

一方、中央アジアを含む新しい独立国家はロシアへの依存度を低下させるために貿易を多様化することにした。これらの動きにより、旧ソ連の共和国相互の貿易関係が切断された（表1参照）。しかし、CIS内におけるこういった否定的な傾向がいつまでも続くともいえない。2000年にCIS内の貿易高は34%増加し、すべての加盟国ではCIS諸国への輸出が増えた。1995年以降初めてCIS諸国からの輸入の成長率が、総輸入の成長率を上回った。とはいえ、絶対

¹ CIS公式統計は未完成なものであり、関係国の社会的・経済的な傾向を広範囲に比較することは困難である。分析の目的に応じて、ロシア連邦国家統計委員会等の資料も利用した。

² 独立国家共同体（Commonwealth of Independent States - CIS）の加盟国は、アゼルバイジャン、アルメニア、ベラルーシ、グルジア、カザフスタン、キルギス、モルドバ、ロシア、タジキスタン、トルクメニスタン、ウズベキスタン及びウクライナの旧ソ連の12共和国である。

³ ロシア連邦国家統計委員会「ロシア統計年鑑2000」、pp63-64

⁴ ロシア統計年鑑2000、p581

⁵ Voprosy Ekonomiki, 2001年、3号、pp140-144.

値で見ると、CIS外への輸出額はCIS諸国への輸出の4倍、輸入額は20%（1999年は60%）多かった。これらの変化は、貿易価格と量両方の増加に起因していた。例えば、ロシアの場合、価格は輸出が14.5%、輸入が6.9%増加し、量は輸出が12.5%、輸入が約31%増えた。

2000年にはカザフスタンの対CIS輸出も輸入も著しく増加し、タジキスタン及びキルギスの輸出の約半分はCIS向けであったことを強調しなければならない（表2参照）。一方、カザフスタン以外は、CISとの貿易を含む総貿易高は少なかった。また、面白いことに、2000年カザフスタンの輸出の25%以上は、パーミューダ諸島及びバージン諸島向けである。

国別で見ると、中央アジアの貿易は、ロシアに集中している。これは、この地域諸国は現在もロシアからの燃料やエネルギー資源などの原料の輸入に大きく依存しているからである⁶（表3参照）。

CIS内輸出の増加は、部分的に一次産品及び加工品の価格増加に起因している。一般に、CIS内貿易においては国際価格が基準価格となっている。しかし、石油はCISでは国際レベルより安い価格で売買される場合があった。2000

年に、ウラル石油の国際価格は1トン当たり約180ドルであったが、CIS市場では140ドルで売られていた。同時に、ロシアからのガソリンは、CIS以外には218ドルであったが、CISには253ドルで販売していた。1999年及び2000年に、ロシアは石炭をCIS以外に1トン当たりそれぞれ16ドル及び26ドルで輸出したが、CIS加盟国には19ドル及び31ドルであった。

一方、CIS内の貿易は、化学製品、金属、その製品、機械の取引などCIS内の分業における肯定的な傾向を反映している。例えば、2000年のキルギスのCIS外貿易における機械・輸送機械の割合は僅か8%であったが、CIS向け貿易では18%に達した。ロシアも同じ状況であり、それぞれ7%と17%であった。しかし、EUでは貿易における機械・設備の割合が30-50%に達する国があることを考えると、上述のレベルは高くない。

CIS加盟国の経済ニーズを満たすためのCIS割合は、平均して1999年の39%から2000年の45%にまで上がった。そこには、消費財、エネルギー資源及び一次産品のほか、機械や生産設備などの投資財、非鉄金属・その製品、鉱石、選鉱、綿・毛糸なども含まれている。しかし、CIS内貿易

表1．1995-2000年中央アジア諸国の貿易におけるCISの割合

（単位：%）

	輸 出			輸 入		
	1995	1999	2000	1995	1999	2000
カザフスタン	54.9	26.7	26.2	69.7	43.3	54.6
キルギス	65.8	40.4	41.1	67.7	43.2	53.9
タジキスタン	33.6	45.7	47.7	59.0	77.6	82.9
トルクメニスタン	49.4	n/a	n/a	54.6	n/a	n/a
ウズベキスタン	39.3	n/a	n/a	40.7	n/a	n/a
ロシア	18.6	14.7	13.4	29.2	27.6	34.4
極 東	0.2	0.7	n/a	5.3	4.0	n/a

出所：CIS統計委員会「CIS統計」統計速報14号、2001年、p7、「極東ロシア：経済的ポテンシャル」ロシア科学アカデミー極東支部経済研究所、1999年、ロシア連邦国家統計委員会「ロシアの地方2000」統計年鑑。

表2．2000年中央アジア諸国の貿易

	輸 出			輸 入		
	総輸出	CISへ		総輸入	CISから	
	100万ドル	100万ドル	対1999比、%	100万ドル	100万ドル	対1999比、%
カザフスタン	9,140	2,390	160	5,052	2,757	173
キルギス	505	207	113	555	298	115
タジキスタン	779	374	119	674	560	109
トルクメニスタン	n/a	n/a	n/a	n/a	n/a	n/a
ウズベキスタン	n/a	n/a	n/a	n/a	n/a	n/a
ロシア	102,796	13,785	129	33,769	11,648	140

出所：CIS統計委員会「CIS統計」統計速報2001年、14号、p77、4号、p47。

表3．1999-2000年中央アジア諸国のCIS内貿易におけるロシアの割合

（単位：%）

	輸 出		輸 入	
	1999	2000	1999	2000
カザフスタン	76.3	74.6	84.5	89.2
キルギス	38.6	31.4	42.2	44.4
タジキスタン	36.5	69.2	18.0	18.8
トルクメニスタン	n/a	n/a	n/a	n/a
ウズベキスタン	n/a	n/a	n/a	n/a

出所：CIS統計委員会「CIS統計」統計速報14号、2001年、p78

⁶ CIS統計委員会「CIS統計」統計速報5号、2001年、p44。

ではロシアだけが黒字であり、最大の赤字国はカザフスタンである（表4参照）。

ロシアは貿易の方向転換を続けているため、ロシアと中央アジアとの間の経済関係が弱まる傾向がまだ続いている。ロシアの対CIS諸国の貿易黒字は増加しており、CIS諸国の対ロシア債務も約100億ドルに近づいている。こうした状況の中、ロシアの輸出業者がCISへの輸出を制限せざるを得ない場合も出てきている。例えば、2000年1 - 9月に、CISの天然ガス輸出は1999年1 - 9月の740億m³から450億m³まで、石油輸出は1,880万トンから1,260万トンにまで縮小した。1995年から2000年にかけて、タジキスタン以外の各加盟国では総輸出におけるCISへの輸出の割合が低下した。また、輸入の場合もロシア及びタジキスタン以外同様である。

CISの1990年代のマイナス成長及び貿易の低下と、輸送、特に鉄道輸送との間には密接な関連がある。この経済分裂の10年間で、中央アジアの鉄道輸送は大幅に減少し、2分の1から10分の1となった。しかし、極東での鉄道輸送減少はロシア全体より大きかった（表5参照）。

1999年に鉄道によるトンキロベースの総輸送量は、ロシアで14%、タジキスタンで43%増加したが、カザフスタン及びキルギスではそれぞれ7%および25%低下した。なお、CIS全体では1999年に総貨物輸送量は4%増え、鉄道は7%、トラックとパイプラインは3%の増加を見せた。トンキロベースでは、総輸送量は4%、陸上輸送量（鉄道・トラック）は13%、空運は11%、パイプラインは2%の増加が記録された。

しかし、中央アジア諸国（カザフスタンを除く）と他の加盟国間の経済関係弱体化よりも大きな障害となっているの

は、輸送料金の高騰である。1999年の料金は、カザフスタンで10%、キルギスで36%、ロシアで18%上昇した。料金が急増する輸送分野もあった。例として、カザフスタンのパイプライン輸送及び航空輸送は40%、キルギスの旅客航空運賃は5倍に高騰した。ロシアでは、トラック輸送が60%、航空貨物輸送が50%、旅客輸送が平均で43%高くなった。

貿易及び輸送におけるマイナス傾向にもかかわらず、中央アジアにとってロシアは依然として重要な政治的・経済的なパートナーであり、10年間にわたって経済関係が縮小した後も他のCIS加盟国にとっても主要な経済的パートナーである。ロシアはCISのGDPに70%を占めており、ウクライナのシェアは11%、そしてカザフスタン及びウズベキスタンはそれぞれ6%に過ぎない。また、中央アジア経済にとって、ロシアの大規模市場、資源、技術及び投資潜在力の重要性が高まるだろう。

現在、CISのリーダー達が掲げる最大の目標は、各CIS加盟国の利害を元に「戦略的パートナーシップ」関係を構築することにある。新しい貿易・経済関係は、民間企業の協力及び貿易の規制緩和、投資環境整備等による経済接触の促進を目指す各政府の政策に基づいて拡大していくものと期待される。例えば、ロシア、ベラルーシ、カザフスタン、キルギス及びタジキスタンは税関協定を結び、関係が密接になっている。これによって、タリフ及び非タリフの障害を廃止し、第三国に対する統一したタリフや貿易規定を導入し、貿易・投資に関する法律を調整することが可能となった。長期的な課題としては、税関同盟及び自由貿易圏の導入を元にユーラシア経済共同体（EAEC）を強化・拡大することである。2000年にロシアのCISとの貿易は

表4．CIS内貿易収支

（単位：100万ドル）

	1995	1999	2000
カザフスタン	230.8	105.6	367.1
キルギス	84.4	75.9	91.1
タジキスタン	226.4	199.7	185.9
トルクメニスタン	184.2	n/a	n/a
ウズベキスタン	8.1	n/a	n/a
ロシア	865.7	2,363.9	2,136.9
極東地域	86.1	48.7	

出所：CIS統計委員会「CIS統計」統計速報14号、2001年、p85、「極東ロシア：経済的ポテンシャル」ロシア科学アカデミー極東支部経済研究所、1999年

表5．1990-1998年鉄道輸送

	貨物、100万トン		旅客、100万人	
	1990	1998	1990	1998
カザフスタン	345.0	170.0	42.6	21.6
キルギス	8.0	1.4	1.4	0.6
タジキスタン	6.7	0.6	1.6	0.7
トルクメニスタン	28.1	n/a	8.2	n/a
ウズベキスタン	82.9	41.8	16.8	15.2
ロシア	2,140.1	834.3	3,142.5	1,471.3
極東地域	113.5	36.9	75.2	41.5

出所：CIS統計委員会「1996年のCIS」統計年間、1997年、ロシア連邦国家統計委員会「ロシアの地方2000」統計年鑑。

280億ドルに達し、前年比で24%増加となったが、ベラルーシ及びEAECとの貿易はそれぞれ33%、43%拡大した。

新しい地位...

国際社会での新しい地位は、中央アジアと日本、中国、韓国、米国などの西側諸国及び国際機関との新しい関係の樹立につながった。例えば、韓国企業はウズベキスタンでかなり大きな投資プロジェクトを実現し、中国は中央アジアのエネルギー産業における協力を興味を見せ、日本及び米国は2国間ODA（政府開発援助）でリードしている。

米国は中央アジアを含むCIS加盟国に対して経済・技術・人道支援の最も綿密かつ広範囲にわたる枠組みを構築した。1998年の金融危機のためいくつかのプログラムが廃止されたが、1999年にカザフスタンは米政府による7,500万ドルの援助のほか、米国輸出入銀行からも長中期ローン、保証、保険承認として2.56億ドルを受け取った。カザフスタンへの援助は、米国国防省からの1,400万ドルを含む7,800万ドルであった。また、同年キルギス、タジキスタン及びトルクメニスタンにそれぞれ8,100万ドル、4,100万ドル、2,300万ドル規模の援助が提供された。2000年に「中央アジア・アメリカ企業ファンド」の資本は1.5億ドルに達した。1996 - 1999年に平和部隊は小規模プロジェクト支援プログラムを通じて中央アジアに35万ドルを投入した⁷。

1995年の開始以来、日本から中央アジア諸国へのODAは累計10億ドルに達している（表6参照）。援助提供の主な理由は、ソ連崩壊そして「この地域の諸国は、独立後の自立的な経済発展のための基盤が十分に整備されていない」⁸ことである。この地域への開発援助は、(1)民主化・市場経済化のための人材育成と制度づくり、(2)運輸・通信インフラを中心とする経済インフラの整備、(3)保健・医療、教育等の社会セクターへの協力、(4)環境保全の4分野が重点である。しかし、中央アジアの日本との貿易は依然として低調である（表7参照）。

日本との貿易が限られている要因としては、超長距離輸送及び高い輸送コストなどの地理的なファクターだけではなく、中央アジアの全般的な社会・経済状況が不安であり、地域市場が小規模であり、輸出能力が低く、現地の生産者が日本市場にオファーできるものが少ないことが挙げられる。これに対して、中国は中央アジアに近接しており、中国とCIS諸国との貿易の中でロシアに次いで2位を占めているカザフスタンは直接輸送ルートで結ばれている（表8参照）。

中央アジアと韓国間の貿易は、ウズベキスタン及びカザフスタンを除いて小規模である（表9参照）。一方、CIS全体の貿易におけるEUの割合は60%を超えている。問題は、ロシアだけでなく他のCIS加盟国も国際市場には進出

表6 . 1995-1999年中央アジアへの日本政府開発援助

(単位：100万ドル)

	1995	1996	1997	1998	1999	合計 1995 - 1999
カザフスタン	4.4	8.9	43.1	95.2	67.5	221.6
キルギス	45.8	44.3	18.1	25.2	62.5	241.1
タジキスタン	0.3	0.3	0.3	0.4	1.5	3.2
トルクメニスタン	0.5	0.7	0.8	4.4	1.7	8.4
ウズベキスタン	16.1	25.3	83.2	103.0	81.6	312.4

出所：外務省経済協力局「我が国の政府開発援助」、2000年。

表7 . 1995-2000年日本との貿易

(単位：100万ドル)

		1995	1996	1997	1998	1999	2000
カザフスタン	輸 出	41.9	125.7	196.1	119.5	85.0	92.1
	輸 入	15.9	32.7	31.2	52.4	59.7	68.7
キルギス	輸 出	0.8	1.2	1.2	0.5	0.6	1.4
	輸 入	5.7	5.2	2.4	1.1	6.2	4.6
タジキスタン	輸 出	20.5	2.7	1.3	0.6	0.2	0.5
	輸 入	0.4	1.4	1.8	5.67	3.1	1.4
トルクメニスタン	輸 出	7.1	3.7	3.0	0.5	0.3	0.7
	輸 入	8.9	7.5	3.8	7.7	14.7	56.1
ウズベキスタン	輸 出	109.4	61.9	36.2	41.1	33.0	78.7
	輸 入	81.3	82.0	55.6	66.6	83.6	24.7
ロシ ア	輸 出	4,763.3	3,948.8	4,018.4	2,892.1	3,756.0	4,592.3
	輸 入	1,170.1	1,024.7	1,014.9	969.3	480.7	571.4
極 東 地 域	輸 出	1,349.0	1,252.0	1,077.0	748.3	684.3	725.7
	輸 入	197.5	177.2	253.8	140.6	140.1	131.7

出所：ロシア東欧貿易会ロシア東欧経済研究所「調査月報」2001年1月、pp 1、67-101、極東・ザバイカル地域間経済協力協会、ハバロフスク。

⁷ U.S. Government Assistance to and Cooperative Activities with the New Independent States of the Former Soviet Union. FY 1999 Annual Report (Washington, D. C.: Office of the Coordinator of U.S. Assistance to the NIS, 2001), 36, 44, 67, 70, 87, 117, 119, 223.

⁸ 外務省経済協力局「我が国の政府開発援助」、2000年。

したばかりだということであり、CISが世界貿易に占める割合は僅か2%ほどである。

興味深いのは、CIS全体で小さなシェアにすぎないながらも、個別の国ごとに見ると世界経済への組み込まれ方の格差が大きいことである。(表10)。

例えば、1992年と比べると、カザフスタン及びウズベキスタンは世界輸出における割合が拡大したが、タジキスタンのシェアは逆に減少した。一方、ロシアの極東地域の輸出及びその世界経済における役割は若干高まり、人口の多いカザフスタン及びウズベキスタン以外の中央アジアより良いパフォーマンスを見せている。

...そして新しい問題

1992 - 2000年にCIS諸国は激しいインフレを伴いつつ市

場価格体制に移行し、インフレのピークはロシアで1992年、キルギス及びタジキスタンで1993年、カザフスタンで1994年であった。1995 - 1996年にはある程度インフレを抑えることができたが、しっかりしたものではなかった。しかし、CIS諸国は1992 - 1994年のようなハイパーインフレを避け、1996 - 1997年にインフレ率は10 - 40%にまで下がった。1998年の金融危機直後、消費者物価はロシアで84.4%、キルギスで17%上昇し、タジキスタン及びカザフスタンでは安定していた。しかし、1999年にはすべての中央アジア諸国が影響を受け、カザフスタンで18%、キルギスで40%、タジキスタンで30%の上昇が記録され、ロシアのインフレ率は36.5%まで下がった。2000年になってから月間インフレ率はようやく下がり始め、キルギスでは僅か0.8%、ロシアでは1.5%となった。ただし、タジキスタンは逆に4%ま

表8 . 1995 - 1999年中国との貿易

(単位: 100万ドル)

		1995	1996	1997	1998	1999
カザフスタン	輸出	315.5	64.6	432.8	430.9	644.4
	輸入	75.5	95.3	94.6	204.7	494.4
キルギス	輸出	123.5	36.8	36.0	25.7	32.0
	輸入	107.5	68.7	70.6	172.5	102.9
タジキスタン	輸出	9.2	4.1	9.2	8.2	5.7
	輸入	16.4	7.6	11.1	11.0	2.3
トルクメニスタン	輸出	6.3	3.0	3.6	2.2	2.0
	輸入	11.3	8.5	11.6	10.3	7.5
ウズベキスタン	輸出	71.0	149.1	141.4	32.4	13.0
	輸入	47.6	38.2	61.5	56.9	27.4
ロシア	輸出	3,798.6	5,153.4	4,086.1	3,640.0	4,222.6
	輸入	1,664.7	1,692.8	2,032.8	1,839.9	1,497.3
極東地域	輸出	346.4	744.2	445.7	877.1	385.8
	輸入	159.4	217.2	312.2	172.2	132.7

出所: 中国統計年鑑1997年、1998年、2000年、極東・ザバイカル地域間経済協力協会、ハバロフスク。

表9 . 1995 - 2000年韓国との貿易

(単位: 100万ドル)

		1995	1996	1997	1998	1999	2000
カザフスタン	輸出	73.5	124.7	83.5	30.9	51.4	49.4
	輸入	52.8	105.5	92.1	104.0	56.6	82.4
キルギス	輸出	1.0	2.5	0.2	0.1	0.05	0.2
	輸入	2.2	3.5	7.9	29.0	23.9	17.1
タジキスタン	輸出	1.5	6.1	1.2	2.0	5.6	9.6
	輸入	12.8	4.4	6.4	2.6	2.1	2.7
トルクメニスタン	輸出	2.9	1.1	0.2	0.04	0.5	0.1
	輸入	0.5	1.6	3.1	8.5	32.2	15.3
ウズベキスタン	輸出	134.8	196.1	297.9	142.4	208.3	104.0
	輸入	244.2	493.8	675.1	384.0	341.4	230.4
ロシア	輸出	1,892.9	1,810.3	1,503.6	998.6	1,590.5	2,058.3
	輸入	1,415.9	1,967.5	1,767.9	1,113.8	637.1	788.1
極東地域	輸出	305.4	418.2	425.7	315.3	352.7	389.9
	輸入	215.1	324.7	476.5	587.2	166.3	184.7

出所: 韓国税関サービス (<http://www.customs.go.kr/eng>)、極東・ザバイカル地域間経済協力協会、ハバロフスク。

表10 . 1992 - 1999年貿易高及び世界輸出における割合

	貿易高、10億ドル		世界輸出における割合、%	
	1992	1999	1992	1999
カザフスタン	1.4	5.6	0.04	0.1
キルギス	0.1	0.5	0.0	0.01
タジキスタン	0.1	0.7	0.0	0.01
トルクメニスタン	0.9	0.6	0.02	0.01
ウズベキスタン	0.9	3.2	0.02	0.1
ロシア	53.6	73.7	1.5	1.3
極東地域	1.5	2.6	0.04	0.05

出所: ロシア連邦国家統計委員会「ロシア統計年鑑2000」、p630、「極東ロシア: 経済的ポテンシャル」ロシア科学アカデミー極東支部経済研究所、1999年、IMF「国際財務統計」、2000年。

で高まった。

ロシア及びCIS諸国には、国家予算の慎重さがインフレを抑制するツールとして非常に重要であることの理解ができた。当初は、予算赤字を補填するために紙幣発行を行っており、その後、90年代後半には国債（内外債）が多かった。しかし、1998年の金融危機後、ロシアは再び紙幣発行を始めた（表11参照）。

1990年代、特に1992 - 1994年は中央アジアを含めてCIS諸国がGDPの急減に直面していた（表12参照）。

1995年以降マイナス成長がある程度抑えられ、1996 - 1997年にCISの中の10カ国はプラス成長に転換した。1998年から1999年前半にかけて、ロシアでの危機の影響もあってGDP成長率は低かった。ベラルーシ及びカザフスタンを除くと、全体として1991年から2000年の間にCIS諸国の一人当たりGDPは約40%低下した⁹。1999年にロシアはCISのGDPの68%を生産した。ウクライナ、ベラルーシとモルドバを合わせたシェアは約16%、中央アジア諸国の割合は14%となった。1998年以前、ロシアはCISのGDPの79%を占めていたが、CIS諸国通貨がルーブルに対して高くなり、このシェアが減少してきた。また、1999年にカザフスタンを含むすべての中央アジアの国はロシアの経済回復が見える前から既にプラス成長を始めていたからである。

1998年に、ロシアのGDPは 4.9%となり、その極東地域の地域総生産は7.5%減少した。その後、ルーブルの切り下げにより国内生産者の競争力が高まり、石油価格が高騰したため、1999年にはGDPも鉱工業生産も増加（ロシアは

8%、極東は7%）し、経済状況は改善した。

1999 - 2001年に経済指標が改善したにもかかわらず、中央アジア及びロシアは、まだ、銀行制度及び金融市場の未整備、投資減少などの問題を解決しなければならない。1990年代に、支出面からみたGDPにおける粗資本形成の割合は3分の1から5分の1にまで縮小し、カザフスタンなど中央アジアで経済規模の大きな国では粗資本形成が1990年レベルの20%まで減少した。

生産設備の近代化及び更新は現在のCIS諸国の能力を超える努力を必要としている。ロシアの多くの産業で70%以上の固定資本が老朽化し、利用できない。更に、融資の金利が高すぎるため、企業は資金を減価償却準備金から運転資金にまわす。1999 - 2000年にロシア及び中央アジア諸国を含めてCISの殆どの産業はプラス成長を記録したにもかかわらず、固定資本の更新や近代化が行われず、既存設備の稼働率の増加だけが見られた。

1995年から1999年にかけて、キルギスを除くCIS加盟国のGDPにおける粗資本形成の平均シェア（名目価格）は25%から19%、固定資本への投資は22%から19%にまで縮小した¹⁰。具体的に言えば、GDPにおける粗資本形成の割合は、カザフスタンで22%から13%まで、キルギスで20%から16%まで、ロシアで21%から18%まで、タジキスタンで23%から17%まで減少した。

1998年以降、殆どのCIS加盟国で固定資本投資の増加が見られ、2000年の平均増加率は15%（1999年は5%）となった。カザフスタンでは29%、キルギスで4%、ロシアで

表11．1991 - 1999年予算赤字の対GDP比

（単位：％）

	1991	1992	1993	1994	1995	1996	1997	1998	1999
カザフスタン	-	-	-	-	4.0	2.6	3.7	3.9	0.6
キルギス	-	-	-	7.7	11.6	5.4	5.2	3.1	2.6
タジキスタン	-	-	-	-	-	-	-	-	3.8
トルクメニスタン	-	-	-	5.2	1.3	-	-	-	-
ウズベキスタン	3.4	10.9	3.0	4.2	2.8	3.4	2.5	-	-
ロシア	2.7	3.4	4.6	10.3	3.1	4.3	5.0	3.6	1.2

出所：CIS統計委員会「CIS統計」統計速報3号、2000年、p17

表12．1992 - 1999年の実質GDP、前年比

（単位：％）

	1992	1993	1994	1995	1996	1997	1998	1999	2000	2000 to 1991, %
カザフスタン	94.7	90.8	87.4	91.8	100.5	101.7	98.1	101.7	109.6	77.9
キルギス	86.1	84.5	79.9	94.6	107.1	109.9	102.1	103.6	105.0	72.0
タジキスタン	n/a	83.7	78.7	87.6	83.3	101.7	105.3	103.7	108.3	57.8
トルクメニスタン	n/a	n/a	n/a	n/a	n/a	n/a	n/a	n/a	n/a	n/a
ウズベキスタン	88.9	97.7	94.8	99.1	101.7	105.2	104.4	104.4	104.0	99.0
ロシア	85.5	91.3	87.3	95.9	96.6	100.9	95.1	103.2	107.7	67.5

出所：CIS統計委員会「CIS統計」統計速報7号、2001年、p54

⁹ CISでは、GDP算定の正確さは、間接経済及び国家統計委員会などに把握されない経済活動の規模をどの程度予測するかによって大きく左右される。例えば、カザフスタン及びロシアの間接経済のシェアはGDPの4分の1、キルギスは6分の1、ウズベキスタンは10分の1と見られている。

¹⁰ CIS統計委員会「CIS統計」統計速報7号、2001年、pp10-11

18%の増加が見られた。とはいえ、2000年の固定資本投資の量は1995年レベルの91%に過ぎなかった。2000年に極東ロシアのサハリン州では固定資本投資が倍増し、サハ共和国（ヤクート）では70%増え、これらの地方は地域全体の発展に大きく貢献した。

中央アジアの投資構造を見ると、経済活動への政府の関与の度合いを縮小させている国がある。カザフスタン及びキルギスの場合には90%以上、ロシアの場合には約80%の投資は国家予算外の資金によるものであった。2000年にカザフスタンでは61%の投資が企業の自己資金によって賄われ、カザフスタンではこれが27%、ロシアでは46%であった。タジキスタン及びウズベキスタンでは逆に総資本投資の60%以上は国家によるものであった¹¹。

1998年にキルギスではバルイクチ～コチコル～カラ～ケチェ間鉄道などの建設プロジェクトの実施により、固定資本投資における輸送分野の割合は、前年の6.5%から22.8%にまで増えた。また、タジキスタンではその割合は13.2%から33.8%まで増加した。これは、クルガン～ツベ～クリャブ間の鉄道やクリャブ空港の建設が行われたからである。1999年の総投資における輸送・通信分野のシェアはキルギスで32%、タジキスタンで40%、ロシアで22%、その極東地域で20%を占めた。

固定資本投資における鉱工業のシェアは、キルギスで35%、ロシアで37%、タジキスタンで18%となった。極東ロシアではこの指標は61%であった。石油ガス産業、電力及び石油化学工業が最大の投資対象となっており、ウズベ

キスタンでは鉱工業向け投資の74%、ウズベキスタンで30%、ロシアで49%を占めている。タジキスタンでは鉱工業投資の34%が軽工業、33%が鉄鋼工業に投入された。1999年にロシアでは食品工業への投資の割合が16%まで増えた（1998年は12%）。これはロシア国内生産者が販売市場の拡大に力を入れた結果であった。

未だ家計貯蓄が不十分であり、銀行システムが未整備であることが中央アジア経済の悩みである。銀行口座の保護メカニズムが未完成であること、個人口座の利息が低すぎることで、インフレ及び国内通貨の対外為替レートの悪化のため、国民は外貨を購入して貯蓄しており、銀行の投資能力は限られている。また、1998年半ば以前、短期国債による利回りが高すぎたため投資家の意識が散ってしまい、現われたばかりの金融市場に大きな打撃を与えた。投資環境が悪いため、外資の導入も阻害されている。1998年8月のロシア金融危機は、外資の流出だけでなく、国民の収入の急激な減少をもたらし、それにより国民の貯蓄能力及びその商業銀行への信頼が失われこととなった。

人口

1990年代、CIS諸国は人口動態面で大きな打撃を受けた。労働可能人口は、総人口及び労働可能年齢人口のいずれに対しても減少した。平均余命や健康など人口に関する情勢が特に悪化したのは、ロシア、ウクライナ及びベラルーシである。1995年以降、CIS人口は300万人減少したが、そのうちの240万人はロシアの分である。極

表13．1990 - 2000年人口動態及び平均余命

	人口 100万人		人口 対1990年比		平均余命	純増減 1,000人当たり
	1990	1999	1993	1999	1998	1998
カザフスタン	16.4	14.9	99.4	90.9	64.4	4.6
キルギス	4.4	4.9	100.0	107.0*	67.1	14.8
タジキスタン	5.3	6.1	108.0	115.0*	68.4	16.1
トルクメニスタン	3.8	4.8	113.0	126.0	66.9	14.5
ウズベキスタン	20.6	24.5	107.0	0.0	70.3	17.2
ロシア	148.5	145.9	99.9	98.2	65.9	4.8
極東地域	8.1	7.2	96.7	88.9	64.4	1.6

*1998年

出所：ロシア連邦国家統計委員会「ロシア統計年鑑2000」, pp599-601、ロシア連邦国家統計委員会「ロシアの地方2000」統計年鑑。

表14．1995 - 1999年人口自然増減率

(1000人当たり)

	1995	1997	1998	1999
カザフスタン	6.8	4.8	4.6	4.3
キルギス	17.8	14.6	14.8	14.6
タジキスタン	22.7	19.2	16.1	14.4
トルクメニスタン	21.3	15.0	14.5	13.1
ウズベキスタン	23.4	19.7	17.2	17.0
ロシア	5.7	5.2	4.8	6.4
極東地域	2.4	2.1	1.6	3.1

出所：CIS統計委員会「CIS統計」統計速報20号、2000年、p108、ロシア連邦国家統計委員会「ロシアの地方2000」統計年鑑。

¹¹ 1999年、固定資本投資における国家企業の割合は、カザフスタンで86%（1995年は55%）、キルギスで67%（73%）、ロシアで73%（63%）であった。

東の人口も減少した。この地域の人口減少には、全体に共通のネガティブな要因の他に、北部からの人口流出もあった（表13参照）。

多くのCIS加盟国では、人口の高齢化が進み、出生率が減少している（表14参照）。カザフスタンを除いて中央アジアでは人口が増えているが、1980年代と比べると増加率が低下した。

極東地域を除くロシアでは、中央アジア諸国と違ってCISからの人口流入もあり、社会増が起きている（表15）。1999年、ロシアで約21万人の外国人が公式的に雇用され、その30%はウクライナ、15%は他のCIS諸国、残りはトルコ及び中国、さらにベトナム、旧ユーゴスラビアを含むCIS以外からの外国人労働者であった。

その他のCIS諸国では、公式に登録されている年間労働力移動はカザフスタンの1.2万人を含めて3万人であるが、そのうちCIS諸国からの流入労働者は1,000人に過ぎない。しかし、強調しなければならないのは、実際のCIS内の労働力移動が公式データより何倍も大きいと見られていることである。一方、1998-1999年のCISからの人口流出は毎年20万人となり、その90%以上はドイツ、イスラエル、米国及びギリシャが占めていた。

雇用及び社会動向

1999年時点で、CIS全体の労働可能人口は1.2億人であり、そのうち2,040万人は中央アジア、6,450万人はロシア、320万人はロシアの極東地域に居住していた。1998年と比べると、中央アジアの労働者数は、カザフスタンを除いて増加した。ロシアでは32.1万人、極東地域では1.4万人の増加が記録された（表16参照）。

中央アジアでは、雇用市場が形成されつつあり、また経

済のリストラが進んでいるため、サービス分野において比較的多くの雇用機会があった。一方、1990年代を通じて鉱工業、建設及び輸送の規模は縮小していた。最も大きい受け皿は民間企業であり、その従業員数はカザフスタンで約460万人（総従業員数の75%）、キルギスで130万人（77%）、タジキスタンで100万人以上（約60%）、ウズベキスタンで650万人（72%）及びロシアで3,950万人（62%）に達している。極東ロシアでは54%の従業員が民間企業で働いている。

1992年から失業者数が急増し、2000年半ばに1,400万人となった（ILO基準で算定）。ロシアの公式登録失業者数は320万人であったが、独自で仕事を探す人を含めるとその数は850万人となる。カザフスタンの2000年の失業者は約100万人であり、そのうちの28万人は公式登録失業者であった。

しかし、求人数一人に対する失業者数が、ロシアで1.4人、カザフスタンで27人、キルギスで32人、タジキスタンで9.5人であることを考慮すると、ロシアの雇用事情は中央アジアほど深刻ではないといえる。

1990年代後半には、実質収入や賃金が減少し、生活費用が高騰したため、貧困問題が深刻化した。1999 - 2000年時点で収入が貧困ラインを下回る人の割合は、カザフスタンで34.5%、キルギスで55%、ロシアで27%であり、極東地域のハバロフスク地方で28%、ユダヤ自治州で55%、及びチュコト自治管区やコリャク自治管区のような北部地方で70%を超えていた。

1998年8月のロシアの金融危機は、CISの社会的・経済的事情の深刻化を招いた。例えば、1999年の家計の実質現金収入はカザフスタンで2%、ロシアで14%、極東の沿海地方、マガダン州及びカムチャッカ州で17%低下した。ま

表15 . 1999年社会増減

	1,000人	人口1万人当たり
カザフスタン	126.3	84.6
キルギス	9.9	20.4
タジキスタン	n/a	n/a
トルクメニスタン	n/a	n/a
ウズベキスタン	62.1	25.4
ロシア	154.6	10.6
極東地域	63.1	87.0

出所：CIS統計委員会「CIS統計」統計速報20号、2000年、p101、ロシア連邦国家統計委員会「ロシアの地方2000」統計年鑑。

表16 . 1990 - 1999年雇用動向

	労働可能人口、100万人		失業者、1,000人		失業率、%	
	1990	1999	1994	1998	1994	1998
カザフスタン	7.8	6.1	536	925	7.5	13.1
キルギス	1.7	1.7	71	106	4.1	5.9
タジキスタン	1.9	1.8	32	54	1.7	2.9
トルクメニスタン	1.5	1.9	n/a	n/a	n/a	n/a
ウズベキスタン	7.9	8.9	22	33	0.3	0.4
ロシア	75.3	64.5	5,702	8,876	8.1	13.3
極東地域	4.0	3.2	328	559	8.4	15.1

出所：ロシア連邦国家統計委員会「ロシア統計年鑑2000」、pp602-604、ロシア連邦国家統計委員会「ロシアの地方2000」統計年鑑。

た、1999年には最低生活費用の増加が現金収入増加を上回り、キルギスで137%対133%、ロシアで184%対159%となった。

1998年の一人当たりGDP（購買力平価）を見ると、ロシア及びベラルーシは上位にあり、カザフスタンはCIS平均レベルである。他の中央アジア諸国はCIS平均を大きく下回り、タジキスタンは特に深刻な状況にある（表17参照）。

すべてのCIS加盟国では社会事情が悪化し、人的資源を開発する力が弱まってきた（表18参照）。中央アジアと比較すると、ロシアはまだ大学進学率が高いが、極東地域はロシア平均を大きく下回る。しかし、保健や自家用車保有率で極東がロシア平均よりも中央アジアよりも優位である。1996 - 1999年には、キルギス及びロシアでの自家用車の数が7%増え、カザフスタン及びタジキスタンではそれぞれ5%減少した。

1998年の民間保有トラック台数及びバス台数の増加率は、カザフスタンでそれぞれ4%及び20%、キルギスで10%と33%、タジキスタンで12%と12%、ロシアで13%と16%であり、これは輸送分野の民営化が進んでいることを示している。1990年代末に民間トラック及びバスの数は個人所有を含めて約280万台となり、自家用車の数は2,800台に達し、さらに増加を続けていた。一方、トラック台数は減少しており、1998年にカザフスタンでは27%、キルギスで11%、タジキスタンで44%、ロシアで17%減となった。

1990年代の経済混乱は、住宅建設に悪影響を与えた。2000年にCIS全体で4,800万㎡のアパートが新築されたが、これに対し1991年の新築面積は9,640万㎡であった。1995年以降住宅建設は17%縮小し、平均的に1953年のレベルまで下がっている。1992年までと違って、現在では住宅建設

費の大部分は民間企業及び個人によって投下されている。例えば、キルギス、タジキスタン及びウズベキスタンでは民間・個人建設は90%を超え、カザフスタンでは約70%である。2000年のロシア及び極東地域ではそれぞれ50%及び47.7%に達した。

エネルギー産業

かつて1992年までは、エネルギー資源の供給を受けることが、中央アジアの経済的・社会的発展の柱の一つであり、ロシアが優遇価格の石油、石油製品、電力及び天然ガスの最大供給源であった。CISの中でロシアに次ぐ石油生産国はカザフスタンである（表19参照）。

カザフスタンには、シェブロン社系のテンギスシェブロイル社が進めようとしている埋蔵量60 - 90億バレル（8 - 12億トン）のテンギス油田を開発する200億ドル規模のプロジェクトがあり、石油輸出国としての将来は明るい。年間輸送能力6,000万トンのテンギス～ノボロシースク間の石油パイプラインが2001年11月に開通したが、ロシアとカザフスタンの間のエネルギー分野における協力の最大の出来事といえよう。カザフスタンは、海底の石油・ガスの開発から今後40年間に亘って7,000億ドルの収入（税金を含む）を得ると見込まれている。また、政府は今後10年間で石油・ガス開発に650 - 700億ドルの外資を誘致できると予測している。カシャガン海底油田の可採埋蔵量は100億バレル（約14億トン）と見られており、この10年間でカザフスタンが世界最大級の輸出国の一つとなる可能性がある。

1992年までは、カザフスタンはロシアのパイプライン網とつながっていて、石油を輸出することができた。また、カザフスタン東部の鉱工業集積都市はシベリアの石油を移

表17．1999年の豊かさに関する指標

	CISのGDP における割合 %	一人当たりのGDPの 対CIS平均比 %	一人当たりのGDP (購買力平価) ドル	一人当たりのGDP (購買力平価) の対米国比(1996年)、%
カザフスタン	5.3	100	5,158	15.6
キルギス	0.8	46	2,374	7.6
タジキスタン	0.4	20	1,031	3.3
トルクメニスタン	1.4	76	3,934	10.7
ウズベキスタン	3.8	44	2,266	7.2
ロシア	68.7	133	6,839	24.2

出所：CIS統計委員会「CIS1999」統計年鑑、pp87-89。

表18．生活水準の指数

	大学生数 1,000人当たり	医師1名当たりの 人口	100世帯当たりの 自家用車数	1万人当たりの 新築アパート戸数	
	1997	1997	1999	1990	1999
カザフスタン	28	272	25	68	6
キルギス	27	306	17	51	9
タジキスタン	16	499	14	54	7
トルクメニスタン	n/a	336	27	58	n/a
ウズベキスタン	16	306	21	61	32
ロシア	37	219	28	71	27
極東地域	31	203	35	86	17

出所：ロシア連邦国家統計委員会「ロシア統計年鑑2000」、pp605-606、619、ロシア連邦国家統計委員会「ロシアの地方2000」統計年鑑。

入していた。カザフスタンはロシアの精油所向けにある程度の供給し、逆にロシアはカザフスタンの精油所に供給する形でスワップが可能となっている。これに付加えて、カザフスタンはカスピ海経由でイランに石油を供給し、イランがその分をペルシア湾の港湾から輸出することも可能である。こういった形の取引に関する協定が1996年に締結された。

現在、カザフスタンは天然ガスをウズベキスタン及びロシアから輸入している。国内の天然ガス埋蔵量の約40%はカザフスタン北西部のカラチャガナク大規模ガス田に集中しており、このガス田は80億ドルのPS契約に基づいて開発されている。ここでは2000年に460万トンのガスコンデンセートが採掘されたが、将来的には3倍に増やすことが可能であり、天然ガス生産は今後10年間で400 - 500億³に達すると見込まれている。主要ガス田はロシアのガスパイプライン網に近いため、そこから輸出するのは簡単である。また、カザフスタンはウズベキスタン及びトルクメニスタンからロシアへのガスのトランジット（通過）輸送を行っている。一方、カザフスタンと中国の間ではガスパイプライン建設プロジェクトが検討中であり、ウズベキスタンも参加する可能性がある。

また、カザフスタンはロシア及びウクライナに次いで3番目の石炭生産国である。エキバストゥズ炭田はCISで3番目の大きな石炭生産地である。1990年代の鉄道運賃の高騰により、カザフスタンのロシア及び他のCIS諸国へ石炭輸出は1990年の3分の1レベルにまで下がった。同時期に国内需要も大幅に減少し、石炭生産が50%低下した。それでも、カザフスタンはCISの最大石炭輸出国であり、最大消費市場はロシア、次いでウクライナである。1996年にロシア企業2社が電力料金債務と引き換えに、カザフスタンの2箇所の炭鉱を購入した。将来、ロシアはカザフスタン

からの石炭輸入を3,000 - 4,000万トンまで拡大する予定である。

カザフスタンには、主に北部にある54の化石燃料火力発電所、5つの水力発電所及び1つの原子力発電所がある。国内送電網はシベリア、西ロシア、キルギス及びウズベキスタンの電力系統と接続されている。カザフスタンは電力の輸入も輸出も行っており、ロシアの統一電力システム社、キルギス、トルクメニスタン、タジキスタン及びウズベキスタンの各電力会社と連携して操業している。ロシア及びキルギスからの電力は国内消費の10%以上を満たしている。

トルクメニスタンでは、外国直接投資の10分の9が石油・天然ガス開発に投入されている。2箇所ある精油所のうちの1つでは、現在ドイツ及び日本の融資により、14億ドルのアップグレード・近代化プロジェクトが進行中である。1999年7月にフランスのTechnip社は、この精油所での潤滑油プラント建設工事を落札した。

トルクメニスタンの法律では、外国企業は石油・天然ガスを輸出することができず、輸出パイプラインにアクセスできないにもかかわらず、エクソン・モービルはブルン鉱床開発プロジェクトのシェアの40%、コトル・テペ/バルサ・ゲルメスPS契約では52.4%、ガラシュスイズリュクでもシェアを保有している。

石油・ガスを輸出できるルートは、ウズベキスタン、カザフスタン及びロシアを経由する北へのルートだけである。トルクメンネフチ国営石油会社が石油採掘の90%を担っており、残りはトルクメンガス社及びPS契約ベースで操業している外国企業が生産している。政府が決定した公式目標では2010年までに原油生産を100万バレル/日（5,000万トン/年）まで拡大することになっている。

トルクメニスタンの天然ガス確認埋蔵量は2.8兆億³と

表19. 1999 - 2000年のエネルギー産業の指標

		カザフスタン	キルギス	タジキスタン	トルクメニスタン	ウズベキスタン	ロシア
石油確認埋蔵量	100万t	1,370 - 2,411	5.5	1.6	74.8	82.2	6,712-7,534
石油生産	千t/year	34,650	220	19	7,400	7,600	335,500
石油消費	千t/year	11,000	550	1,450	3,250	6,800	117,000
純石油輸出	千t/year	22,600			4,150		218,500
純石油輸入	千t/year			1,432			
精製能力	千t/year	21,350			11,850	11,100	330,000
天然ガス埋蔵量	Bcm	1,820 - 1,960	5.6	5.6	2,830	1,850	47,600
天然ガス生産	Bcm	4.54	0.0098	0.0588	46.5	5,488	582.4
天然ガス消費	Bcm	13.44	1.89	1.1564	12.9	39.8	392.0
純天然ガス輸出	Bcm				33.6		190.4
純天然ガス輸入	Bcm	8.9		1.1			
石炭埋蔵量	100万sh.t	37,500	895		none	4,400	173,000
石炭生産	100万sh.t	64.2	0.46	0.0207	none	3.2	276.3
石炭消費	100万sh.t	39.5	1.22	0.0138	minimal	3.2	268.3
発電能力	GW	17.4	3.8	4.4	3.9	11.8	204
発電量	10億kWh	44.4	13	15.6	8.4	43.5	798
電力消費	10億kWh	44.1	10.2	14.7	4.8	42.9	728
純電力輸出	10億kWh		2.8	0.9	3.6		70

出所：Energy Information Administration, <http://www.eia.doe.gov>

評価されている。ガスプロムはロシアを經由して天然ガスを輸出する国営企業トルクメニスタンガス株式の44%を所有している。2000年までは、トルクメニスタンはロシアとの間でガス輸出価格を巡って交渉を行っていたが、協定締結後は、ガス生産が3倍に増加した。そのうちの大部分は、ウクライナ市場が需要先となっている。ここで指摘しておきたいのは、2000年10月現在、ウクライナの対トルクメニスタンガス料金債務は2.81億ドルに達していたということである。2001年に入る時点で、トルクメニスタンに対して、アゼルバイジャンは5,900万ドル、カザフスタンは5,800万ドルの債務を抱えていた。また、ガスプロムは一時期、14億ドルの天然ガス料金債務を抱えるウクライナへの供給を半分に減らした。2001年5月14日、トルクメニスタンとウクライナは、ウクライナがガス料金を適時に払うという条件の下で2006年までの天然ガス供給協定を結んだ。ウクライナは料金の60%を現金で、残りの40%をトルクメニスタンにおける20件の建設・産業プロジェクト（4.12億ドル）に参加するという形で払うことに合意した。

一方、輸出制限などの多くの要因が石油・ガス開発への外資誘致の障害となっている。例えば、2000年にトルクメニスタンとロシアのトランスネフチ社は、同社がバクー～ノボロシースク間パイプラインを利用して5万バレル/日（250万トン/年）の石油を輸出することに合意した。しかし、トルクメニスタンの石油は硫黄及びパラフィンが多いためこの協定は実施されず、トルクメニスタンは未だにタンカー及び鉄道輸送に依存している。また、トルクメニスタンはイランとスワップ協定を結んで石油を輸出することに興味を示した。トルクメニスタンは既にイラン北部に天然ガスを供給しており、この関係は今後拡大すると見られる。トルクメニスタンの天然ガスの輸出可能な市場としては、イランのほか中国及びパキスタンが挙げられる。

アルメニア、トルクメニスタン及びイランはその送電網が接続されており、これを利用して協力を行っている。1998年5月に、トルクメニスタンはイランへ電力を輸出するために新しい1220 - 400kV送電線を国境まで延長すると宣言した。アルメニア及びイランの送電網が接続されたのは1998年である。一方、カスピ海に面するCIS 5カ国は、海底資源の帰属をめぐる未だに立場が別れたままである。特に、トルクメニスタンは問題水域に110億トンの石油、5.4兆 m^3 の天然ガス埋蔵量があると主張して、アゼルバイジャンと対立している。

ウズベキスタンの石油・天然ガスの埋蔵量は1兆ドル以上の価値があると評価されており、これは他の中央アジア諸国の合計埋蔵量を上回っている。CISの中で、石油生産

量を1990年から倍増させることができたのはウズベキスタンだけである。プハラ精油所は、1992年以降CISで初めて建設された精油所である。このプロジェクトの費用は4億ドルであり、年間生産能力は現在250万トンであるが、将来的に500万トンまで拡大する計画である。1998年、三井はフェルガナ精油所の脱硫設備の能力向上プロジェクト（2億ドル）を落札した。1996年にテキサコはフェルガナ精油所でテキサコブランドの製品を生産するために合弁企業を設立した。2000年にウズベキスタンの精油所（3ヶ所）合計で、500万トンの原油及びガスコンデンセートを加工した。

1999 - 2000年にウズベキスタン政府は、国営持ち株会社ウズベクネフテガスの株式の49%を民営化する計画や、外国企業に対して独占権を付与したり一部の税金を免除するなど優遇措置を設けたりする計画を公表することで20億ドルの外資を誘致することができた。

また、今まで発見した合計171ヶ所の油田（予測埋蔵量は8,220万トン）のうち80ヶ所は有望な投資家に開放されることになる。2000年時点で採掘が行われていた鉱床は、石油では51ヶ所、天然ガスは27ヶ所、ガスコンデンセートは17ヶ所であった。一方、ウズベキスタンは、世界に2ヶ国しかない「内陸国に囲まれた内陸国」の一つである。輸出の方法としては、ロシアのオムスク市からウズベキスタンの精製所に石油を運んでいた既存のパイプラインを利用することが一つの方策として考えられる。

ウズベキスタンは、CISで3位の天然ガスの生産国であり、世界でもトップ10に入っている。1992年からガス生産は30%増加したが、国内需要も同じくらい増えた。ウズベキスタンは天然ガスを中央アジア～中央ロシア間のパイプラインを通じてカザフスタン、キルギス、ロシア及びタジキスタンへ輸出しており、カザフスタン及びキルギスが頻繁に未払いを引き起こすことは深刻な問題となっている。キルギスはガスを1,000 m^3 当たり42ドルで購入し、50%を現金で50%を製品で払い、綿栽培時期に水を供給する。また、ウズベキスタンはトルクメニスタンに天然ガス輸出ルートを提供している。

ウズベキスタンのガスは硫黄分が多いため、加工が必要となる。2000年12月に西南部で10億ドルのガス化学複合プラントの建設が完了した。このプロジェクトは、ウズベクネフテガス社が日本国際協力銀行（4億ドル）、米国輸出入銀行（2億ドル）などの国際金融機関からのローンを得て投資した。2001年にイギリスのTrinity Energy社は、今後40年間に亘ってガスコンデンセートの開発・生産に4億ドル以上を投資する計画を明らかにした。

天然ガスの輸出を多様化するために、ウズベキスタンは中央アジア～中央ロシア間の既存パイプラインシステムの強化を含む代替輸出オプションを探ってきた。トルクメニスタン、アフガニスタン及びパキスタンと共同でパキスタン、将来的にインドにガスを輸出するための中央アジアガスパイプラインプロジェクト、及びトルクメニスタンとカザフスタンから中国への8,000kmのパイプライン建設を検討している。

ウズベキスタンの発電事業は、石油・ガス生産と違って低下傾向にあった。ウズベキスタンは電力の輸出国から輸入国に転落した。多くの電力は天然ガス火力発電所で生産され、石炭火力発電所及び水力発電所のシェアは少ない。2000年にドイツのSiemens AG社は、欧州復興開発銀行による2,780万ドルの貸付を利用して、シルダリア発電所の10機の発電機のうち2機の近代化作業を開始した。また、三菱は新しいコンバインドサイクル発電ユニットの建設に2.34億ドルを投入している。

ウズベキスタンは電力を中央アジアの隣国に輸出しつつ輸入もしており、その輸出入の一部は、ウズベキスタン・キルギス・カザフスタン間の「地域の水資源及びエネルギー資源利用における協力に関する協定」の枠内で行われている。夏期にキルギスは水力発電所で発電される余剰電力をウズベキスタンに供給し、その交換としてウズベキスタンは天然ガスを供給する。冬期には、ウズベキスタンは天然ガス、石油及び電力を輸出する。2000年12月にキルギスは22億kWhの電力をウズベキスタンに供給する計画を発表したが、ウズベキスタンはキルギスへのガス供給を停止することを決定したため、取引は取りやめとなった。

最後に、キルギス及びタジキスタンのエネルギー産業であるが、これらの国では電力バランスの90%を占めている水力発電に集中している。石油、ガス及び電力不足がよく起こる。中央アジアの中で、これら2カ国は最貧国であり、より多くの経済問題を経験している。両国がエネルギー問題を解決する力は極めて限られており、CIS隣国及び世界銀行など国際機関による支援、先進国による政府開発援助(ODA)を必要としている。上述のように、現在ロシアがこのような支援を与えるのは困難である。しかし、表17で示されるよう、中央アジアのCIS諸国はソ連時代から多くのエネルギーポテンシャルを相続した。このことが、これらの国々の現在の安寧及び経済発展に大いに貢献したと思われるし、その貢献度がどれだけ大きいといっても過大評価になることはないであろう。

エネルギー分野において、意見の相違や競合のリスクが発生しやすいことは明らかである。同時に、これは中央ア

ジアとロシアとの協力拡大に豊かな可能性を与える分野でもある。例えば、シベリア横断パイプラインは、カザフスタン及びトルクメニスタンにとってロシアと共同での中国向け天然ガス輸出を十分実行可能なものにするための有力な選択肢である。一方、今後2 - 5年間で天然ガスの国内価格が上がると見込まれるロシア市場への輸出も選択肢となり得よう。いずれにしても、ロシア及び中央アジア諸国にとって、ユーラシアエネルギー市場におけるシェアを拡大するためには、石油・ガス開発における利害の調整、開発計画の相互補完性、越境インフラ整備での協力強化といったことが最良の手段であろう。また、このことは「上海5カ国」の枠内でエネルギー分野における長期的関係を強化する可能性を示唆するものであり、さらに中央アジアの安定及び繁栄を約束するものである。2001年11月29日にモスクワで開催されたCISサミットの記者会見でナザルバエフ・カザフスタン大統領はカザフスタン、ロシア、トルクメニスタン、ウズベキスタン及びアゼルバイジャンを含む天然ガス・石油同盟の設立を提案した。

結論

中央アジアの新独立国家は、アフガニスタンにおける対テロ報復作戦及び人道支援に組み込まれ、国際的な注目を集めている。国連、米国及び欧州の高官が何回もこの地域の5ヶ国を訪問した。

独立後の10年間に、経済発展、国民生活及び地域安定性の面で様々な変化があった。貧困の深刻化、民族的な紛争、過激主義及びテロリズムを問題として挙げることができる。この10 - 15年間に亘って、中央アジア民族以外の人の流出を招くようなナショナリズム及び権威主義が強まった国もあった。ロシアでは中央アジア経由で運ばれる麻薬に対する懸念が高まっている。1990年代、人的資源は激減した。総人口及び労働可能年齢人口における労働可能人口のシェアは減少した。社会状況が悪化し、人的資源を開発する力が弱まった。1990年代の経済下落により、住宅建設も大きな打撃を受けた。

1999 - 2001年には経済のプラス成長が記録されたものの、中央アジア諸国は、継続的な投資減少、銀行制度及び金融市場の未整備などの問題を解決しなければならない。中央アジアの投資構造は、いくつかの国で政府が経済活動への関与を縮小させていることを示している。一方、タジキスタン及びウズベキスタンでは、国営企業が圧倒的である。1998年8月に起こったロシアの金融危機は、特にロシアにおいて外国資金の流出や国民所得の減少をもたらした。また、危機以前から中央アジアのCISとの貿易は減少して

おり、1999 - 2000年にやっと活発化する傾向が現われた。

明るい動きとしては、民間企業が最大の雇用機会を提供していることがある。また、中央アジアは、カスピ海の石油・天然ガスを含む天然資源の豊富な地域として注目を集めている。カスピ海では、カスピ海パイプラインコンソーシアムによる大規模石油パイプラインが開通した。韓国企業はウズベキスタンで大規模な投資プロジェクトを実現し、中国は中央アジアのエネルギー産業における協力を興味を示し、日本及び米国は2国間政府開発援助でリードしている。実は、中央アジアを含むCIS加盟国に対して経済・技術・人道支援に関する最も綿密かつ広範囲にわたる枠組みを構築したのは米国である。

1990年代に中央アジアの貿易・投資関係は多様化したにもかかわらず、CIS、特にロシアとのリンクは依然として密接である。2001年11月30日にモスクワでCIS諸国の指導者が集まり、CIS10周年サミットが開催された。中央アジアにとって、市場、貿易、輸送、石油・天然ガスの輸出の観点から見て、北の隣国との協力関係の強化が不可欠であることは明らかとなった。しかし、問題は中央アジア諸国とロシアとの相互依存関係が本当に復興するかどうかということである。

中央アジア諸国とロシアの極東地域を比較すると、社会面・経済面での全体的傾向は同様であったが、輸出、大学進学率、保健水準及び国民所得の面では、極東がリードしていることが分かる。全般的に、極東を含む東ロシアの将来は、地域内の資源を開発し北東アジアへ輸出することができるかによって大きく左右される。カザフスタン、トルクメニスタン及びウズベキスタンも同様である。この意味では、CISの10周年サミットでエネルギー分野における協力の強化及び輸出向けエネルギープロジェクトの調整が提案されたことは非常に重要なことである。最近のアフガニスタンでの動きから考えると、ロシアの東部地域及び中央アジアの国々が欧州及びアジアにとって安定したエネルギー源になりうるのは確かであろう。